

書評

大木志門著

『徳田秋聲の昭和』

―更新される「自然主義」―

小林 修

先ず大木志門の秋聲論が一冊にまとめられたことに心から祝意を表したい。およそ十年間の歳月をかけて完結した八木書店版『徳田秋聲全集』（全42巻・別巻1）に大学院時代から編集補助として終始携わり、続いて新設の徳田秋聲記念館、さらに日本近代文学館に勤務しながら、一貫して秋聲文学を考え続けて来た持続的営為の結実が本書である。研究書としては、松本徹『徳田秋聲』（昭和63年）以来の本格的な秋聲研究書ということになる。そればかりでなく、まともな全集すら無かった秋聲であるが、その全貌を初めて集大成した『徳田秋聲全集』の完結後に、それを十分に活用して実現した初の本格的な研究書でもある。秋聲文学に関心を寄せる一人として、また共に全集編集に携わった者としていささかの

感慨なしとしない。最初に一言祝意を記す所以である。

さて、本書は書名に明らかなように、昭和期の秋聲、すなわち「町の踊り場」から『仮装人物』を経て『縮図』に至る後期の秋聲文学に新しい角度から光を当て、従来秋聲像の更新を目指したものである。本書の基本方針は「作家を昭和戦前という『国家』と『文学』が激動の中にあつた時代のコンテクストに置き直し、政治・文化・経済などその外延の様々な事象をもテクストとして分析し、作家や作品と再接続すること」にあり、そのことによって秋聲が意識的に諸状況に呼応する形で創作活動を行っていた作家であることを明らかにし、自閉した非社会的な作家ではないことを証明しようとした意欲的な研究書である。

本書第一部は「秋聲と昭和十年前後の文壇」と題され、秋聲の「町の踊り場」による復活と文芸復興期の磁場が論じられ、続いて『仮装人物』の達成の意味が多角的視点から明らかにされている。先ず「町の踊り場」は川端康成によって「解脱の境に遊ぶ心境のありがたさ」「伝統の芸の美しさ」などと高く評価されて文壇復活を遂げた

が、文芸復興期の文壇状況や同時代評を分析し、実はそれとは正反対の意味を持つ作品であつたと指摘する。そしてこれを「不思議な構築性に満ちたテクスト」として丹念に分析している。すなわち、喪中に鮎（腥さもの）を求め、ダンス場に遊ぶ主人公を通して、脱俗よりも俗を、伝統よりも新奇を求める姿勢にこそこの作の特質があり、時代への批評性を持った復帰作たり得た要因と見る。また、作中の鮎を巡る「ある」「ない」という奇妙な挿話と次兄の婿養子（軍人）との会話「戦争はありますか」「ありませんとも」の反復を結び付け、「作中の時間は満州事変と日中戦争に挟まれた時期であり」「戦争も「ある」と同時に「ない」という「近代の踊り場」状況の中で、ダンス場へと「行動」をとる意味の解析はたいへんに興味深い。こういうところに著者のいう「不思議な構築性」の一端があるのであろう。ただ、この戦間（戦中）期を「近代の踊り場」状態と呼ぶのは、語呂合わせとしては秀逸だが、この時期特有の緊迫感が希薄化するのはどの違和感も残る。著者も引用する深田久弥「本年度文壇の回顧」の後半部には、「この二三年最も

世間を騒がせた言葉は『非常時』であった。社会の偽りなき鏡である文壇にこの『非常時』が反映しないわけはない。」とも記されている。さらに同じ号には、武田麟太郎の市井事もの「ダンス」も掲載されている。伏字の多いこの作品は、成績優秀な苦学生木村が左翼活動・逮捕・出所を経てダンス教師になった経緯が語られるが、そのダンス教師になる時の試験問題は「非常時日本とダンス」であったという。「町の踊り場」におけるダンスの意味については大木の論に尽されているが、あえて無い物ねだりを承知で言えば、こうした武田の作品なども視野に入れて論じたら、なお良かったと思う。

続く『仮装人物』に関しては、雑誌『行動』による若い作家たちとの交流や学芸自由同盟の代表に就任するなど積極的な新文学の動向や時代状況にコミットする姿勢を見せ、併せてジッドやモンテーニュの撰取を通して自身の自然主義の立て直しを図った、「モダンズム文学」として『仮装人物』を位置づける。これは大杉重男が「自然主義の荘厳」とはジッドやモンテーニュを経由することで成立した「自然主義のモダン

ズム化」だと論じたことを受け、それを具体的に論証しようとしたもので、従来まともに取上げようとされなかった秋聲と西欧モダンズム文学の撰取という問題を究明し、説得力が有る。さらに、私小説再発見の問題や小林秀雄の『仮装人物』評を通して位相を異にする「職業心理」と「作家氣質」の問題を検討し、「順子もの」という「私小説コード」に密着した作品群に懐胎されていた「職業心理」を切断する主体の現われが「作家氣質」だと論じ、この「作家氣質」としての主体認識の結晶が「順子もの」を昇華させた『仮装人物』の達成と見る。続く文芸復興期における長編小説待望論と『仮装人物』との関係を「封建的」日本文学の超克の観点から検討したものも含めて、これらの論者が著者のいう固定した自然主義作家像からの刷新の実態をもっともよく表している。

第二部は、「順子もの」と呼ばれる短篇群や『仮装人物』のモデルとして知られる山田順子に照明を当て、秋聲の側からは見えなかった女性作家としての山田順子像を浮き彫りにすると共に、「順子事件」なるものや「順子もの」の意義を再考したもの

である。また、順子の郷里秋田県由利本荘市の親族宅から発見された山田順子旧蔵のスクラップブックの紹介からは、対メディアにおいて自己表象の操作に意識的であり続けた順子の自意識が具体的に紹介され興味深い。さらに資料編「順子事件」関連文献一覧も貴重である。総じて山田順子研究を大きく進めた論考で、教えられるところ大であった。なお、著者には別に『山田順子作品集 下萌ゆる草・オレンジエート』の編著（二〇一二、八、亀鳴屋）があることも付記しておく。

第三部は「戦時下の文学と作家―『縮図』の周囲」と題され、所謂文芸院問題と対峙した秋聲の「政治性」を詳細に分析・究明した論文（七章）と『縮図』自筆原稿および『縮図』挿絵原画（内田巖）の新資料を紹介しながら戦争と『縮図』の相関の中に秋聲の抵抗の姿勢を読みとる（八・九章）もの、自筆原稿未定稿の検討から「経済小説」として『縮図』を読み、この未完の長編の新たな側面を明らかにしたもの（十章）から成る。

先ず七章では「如何なる文芸院ぞ」を書いて文芸の国家統制に反対し、「学芸自由

同盟」の幹事長を勤め政治的弾圧から学芸の自由を守ろうとした秋聲、文芸懇話会から帝国芸術院会員となる秋声の「政治性」について、文壇の動向や新官僚主義など政治状況も含めて幅広く検証したものである。できれば、日本文学報国会小説部会長となるまでの、すなわち『縮図』以後の秋聲における政治意識も考察してほしいかった。

第八章は、徳田秋聲記念館に徳田家から寄託された『縮図』自筆原稿五十枚（二百字詰）を詳細に検討し、新聞連載後取り戻したと見られる定稿に関しては、削除箇所と情報局による干渉や検閲問題を考察し、秋聲の戦時下における時局との闘争の痕を検証している。（ちなみに大木は内閣情報部が拡大改組されてきたのが「内閣情報局」だと記しているが、「情報局」はあくまで「内閣情報局」という組織は存在しない。「情報局」は内閣直属から離れた独立の官庁である。多くの人が誤解しているのだ、些細なことながら付記しておく。）さらに未定稿、とりわけ「素描一」（八枚）に関しては、現行の「素描一」の内容とは全く異なるゆえに、未完に終わった『縮図』

の書かれざる姿を示唆して興味深い。実はこの未定稿「素描一」の存在は、既に雪華社版『秋聲全集』の口絵写真に一枚目だけが紹介され、評者も昔原稿用紙に写し取ってみたことがあるが、「口絵写真の『仮装人物』と『縮図』の原稿は発表されたものとは別の物である」との説明のみで「解説」などには何も触れられなかったものがある。その後、角川の日本近代文学体系『徳田秋聲集』（昭和48）の「解説」で徳田一穂が『縮図』の三〇回、「素描」の「一」は、銀子の生涯に流れ込むか、均平の生活に反省の目を向けるかで、作者が思い惑った形跡が残されているが、ここでは省いておく。」と述べているだけで、遂に検討されることなかった新資料である。今回他の七枚を含めて連載一回分と見られる異稿が紹介された意義は大きい。大木もこの章が作品の転回点に当る要所と見て、現行『縮図』との比較検討により『縮図』の創作意図を考察している。未定稿には現行『縮図』には登場しない「野田」という「華族の庶子」で銀子によく似た自前の姐さんと壁隣りに逼塞している人物が描かれている。均平と銀子の「写し絵」のような

二人を登場させることで、男が女を搾取しながら日々を安逸にやり過してゆく構造を顕在化させ、花柳界という制度の批判を試みようとしたのではないかと指摘する。だがこの人物は既に「彼女達の身のうへ」（昭一〇・一『改造』）に同様の挿話として描かれており、この作品では、「華族の養嗣子」で「養子先の夫人に死なれてから、わざと二人の子供を遺して」花柳界に逼塞している人物である。つまり均平の人物設定により近い形というよりも、均平の人物設定の元になったと思われる人物である。その設定を多少ずらしたとしても、再び『縮図』に使用するのにためらいが生じたのでは、と想像するのだが如何であろうか？

次に提示される資料は、内田巖による『縮図』挿絵の原画である。戦争を潜り抜けて残った十一枚を紹介し、内田の作風にまで踏み込んで戦争という状況下における文字テキストと絵画テキストのコラボレーションを考察したもので、前章に続いて読み応えがある。大木も引用しているように、『縮図』が中絶を余儀なくされた時、有島生馬から「文章よりも君の絵が刺戟したの

だよ、責任は君だよ」と言われたことを内田は誇らしく回想している。小説と挿絵の協同からなる抵抗の力を示すエピソードであろう。これについて評者が想起するのは、『縮図』中絶の年の年末に同じ『都新聞』

に発表された河上徹太郎の「新世紀の幕—文壇歳末雑感(四)—」である。河上は、この年一番印象に残った小説は『縮図』だと述べ、その中絶を惜しんだ後、「この作品は秋聲氏一代の最高傑作である。人物は簡潔な筆措のうち、しかも何人にも見逃し得ぬ肉体と宿命を曳摺つて動き更にも亦、文章の明確と精練はその比を見ないのである」と絶賛し、「一例を挙げれば、松島に遊ぶ場面があつたが、蕭條たる冬の海の風景が的確に額縁に納められ」「風景描写の極致」だとも指摘している。しかし、小説中の松島・塩竈の場面には「蕭條たる冬の海の風景」描写は見当たらない。おそらく連載六七回の挿絵が印象に残っていたものと思われる。こんなところにも内田の挿絵の影響力を窺うことが出来る。以上は蛇足だが、さらに大木は内田が自負する日本髪の実現力に着目し、「髪が駆動する物語」として、「髪」による戦争との闘争を読み

とっており説得力がある。(私もこの原画を見たばかりでなく、戦後別に描かれた銀子の肖像画四枚を見ており、その日本髪の実現のすばらしさは忘れがたい。)

最後は、「素描—」未定稿の検討から、秋聲が当初持っていた執筆意図「花柳界の裏面をあげてみせる長編小説」を書きたいとの抱負と関連させ、『縮図』を「経済小説」として読み直している。先に挙げた「彼女達の身のうへ」も晴子(小林政子)の元へ住み替えてきた年増芸者の行き詰まった運命を中心に花柳界の裏面を描き出した佳編である。これをさらに徹底発展させた『縮図』も経済(資本)という視点から花柳界を通して近代日本の縮図を描き出すとしたとの指摘は、『縮図』の隠れた側面と興行を捕らえており興味深い。以上のように、本書は従来の秋聲研究を刷新させる問題提起に満ちた意欲的研究書である。

【付記】本稿は一年前に掲載予定のものであったが、筆者の怠惰から大幅に遅延してしまつた。大木氏および本誌関係者に深くお詫び申し上げます。

(こばやし おさむ 実践女子大学名誉教授)

高松亮太著

『秋成論攷 学問・文芸・交流』

近衛典子

秋成の生涯において著された作品には、周知の小説類だけでなく多くの国学関係の著作や和歌・和文、俳諧、随筆、煎茶の書など、幅広く豊かなものがある。特に秋成は同時代人から「歌道之達人」と評される如く、和歌および和文の達成には目を見張る。しかし秋成研究の長い歴史において、その方面の研究はまだ緒に就いたばかりと言つてよい。本書は多くの新資料を提示した上で、その豊饒なる沃野に正面から切り込み、丹念な実証と的確な推論によつて秋成とその周辺の和学の展開のありようを浮き彫りにするものであり、従来の欠を大きく埋める好著である。また、それ故に登場する従来あまり馴染みのない多くの人名や書名に振り仮名を付すなど、読み易い工夫が施され、細やかな心遣いが感じられる。本書の構成は次の通りである。

第一部 秋成の和学活動

第一章 秋成の万葉集講義

第二章 秋成の実朝・宗武をめぐる活動  
第三章 秋成と蘆庵社中

第二部 秋成の学問と文芸  
第一章 秋成の師伝観と『戴恩記』

第二章 秋成歌論の一側面  
一 『十五番歌合』をめぐる――

第三章 『春雨物語』『目ひとつの神』の  
和歌史観

第四章 『春雨物語』の「命祿」  
一 「目ひとつの神」を論じて主題

と稿本の問題に及ぶ――

第三部 秋成の和学とその周辺

第一章 山地介寿の在洛時代

第二章 荒木田久老『万葉集槻乃落葉四

之卷解』の生成

第三章 林鮎主の和学活動と交流

第四章 林鮎主年譜稿

おわりに

本書には主として秋成の京都移住以降の学問研究のあり方、その分析から抽出される秋成の思想と文藝との交渉、そして後世における享受の具体相が丹念に描かれる。以下、高松氏の論旨に従い、適宜概観していきたい。

第一部では秋成の国学研究における門人の存在にスポットを当てる。享和三年前後から始まる僧斎取と秋成との交流を踏まえ、『藤篋冊子』の成立過程も視野に収めつつ、『金砂』成立への大坂の蘆庵社中の関与を明らかにする第三章は論のスケールが大きく、特に興味を引かれた。今後の様々な論点を胚胎する好論であると言えよう。

第二部では『雨月物語』『仏法僧』の典拠に『戴恩記』を挙げ、この書が秋成の学問形成の一端を担った可能性を指摘。また『春雨物語』『目ひとつの神』において歌道衰退は『春雨物語』執筆から約五百年前、歌道家が二条・冷泉・京極に分裂する

時期を想定しているとし、『蒙求』『張翰適意』の故事から「帰郷」のイメージを抽出するなど、次々と新しい典拠や解釈が繰り出され作品のより深い読解へと誘われる。

第三部では、林鮎主、山地介寿といった秋成の次世代の人物の著作や人間関係に新たな光を当て、秋成の交友や学問の広がり

を綿密に立証する。京の鈴門と秋成との距離感ほどのようなものであったのか、など、大いに発想を刺激され、面白かった。

問題の所在を明らかにして、それを次々

に解明していく高松氏の正攻法の研究は見事と言うほかに、胸のすく思いで一氣に

拝読した。本書の大きな功績の一つは多くの新資料を発掘しつつ、精密な読解に基づき数々の新知見を提示していることであろう。新資料にすべて影印が添えられていることは高松氏の真摯な研究態度の反映であり、今後の研究の発展の見地からも、誠に

有難いことである。以下に、新資料について少しく私見を加えておきたい。

第一部第二章「秋成の実朝・宗武をめぐる活動」は、源実朝・田安宗武という二人の万葉調歌人に対する秋成周辺の関心を浮き彫りにした、意欲的な論考である。論は

まず、『和歌類集』(大江茂樹撰)所載の賀茂真淵筆と明記される奥書と、『金槐和歌集』全七一九首の中から秋成が一七五首を抄出した『金槐和歌集拔萃』所載の秋成

筆とされる奥書、このほぼ同文の二つの奥書について、両者とも秋成筆であると断じるところから説き起こされる。そして、実

朝・宗武それぞれの歌集『金槐和歌集』『天降言』の「抜粹」という堂為の広がりとその意味を丁寧に跡付けていく。その視線は近代の正岡子規にまで及び、その論法は誠



に鮮やかで、教えられることが多かった。ただ、次の点については、いささか疑問な点もないではない。

『天降言』の抜粹である『田安垂槐御歌』の奥書、「此間に、つばらに金槐集の抜粹とこれの垂槐御の歌との、後の世ながら上つ代のすがたに自然おもほえぬるよし、くさく書しるしける。また其後に歌／宇治川のそこのこつみとながれてもその根はくちぬ瀬々のあじろぎ／阮秋成記」（四六頁）について、高松氏はこれを秋成の新出奥書であると認定され、この奥書の内容について、「此間に」が抜粹本の末尾の意か「以前」という程度の意か不明瞭であるものの、「くさく書しるしける」という内容が、魚臣本奥書のそれと正しく対応している」として、秋成から魚臣に初度の抜粹本、鮎主に再度の抜粹本が与えられたかと推察される。氏の説は、実朝・宗武の詠風を論じた魚臣本の奥書部分をカットし、鮎主所持本では代わりにこの奥書を置いたと解釈しての立論であろう。

この立論に、大筋では異論はない。しかし、「此間に」に注目すれば、この内容についてもう少し別の解釈も成り立つのでは

ないだろうか。つまり、この奥書が秋成筆ではない可能性も、同時に検討する必要があるのではないかと思うのである。高松氏の緻密にして画期的な論に大いに刺激を受け、僭越ながら以下に卑見を述べたい。

『田安垂槐御歌』本文において、この奥書以前には宗武の和歌三十七首が記されるのみで、「くさく」の内容に該当する内容の記述は見当たらない。一方、高松氏が指摘されるように、沢真風は林鮎主より提示された『金槐和歌集』『田安垂槐御歌』のうち、『金槐和歌集』は板本に校合したためここには省略し、『田安垂槐御歌』のみを写し留めたという。そこで、この書の成立を念頭に置いた上で、改めてこの奥書について検討を加えてみる。

『金槐集の抜粹とこれの垂槐御の歌との、後の世ながら上つ代のすがたに自然おもほえぬるよし』を「つばらに」「くさく書しるしける」文章とは何か。それは高松氏が先に秋成筆と断定された『金槐和歌集抜粹』奥書、及び『上田秋成全集』第十一卷所収の天理図書館蔵『天降言』や魚臣本に見られる秋成筆の奥書（今どちらかに限定する必要はない）の内容そのものを

指すのではないだろうか。つまり、これを「本来、底本とした『金槐和歌集抜粹』や『田安垂槐御歌』には実朝や宗武を称揚するそれぞれの奥書が記されていた」という意味の注記と考えるのである。そして「此間に：」は「また其後に歌」と対応し、『田安垂槐御歌』においては【此間に】（宗武の和歌群と秋成歌「宇治川の」との間に）秋成が『天降言』に付したのと同内容の奥書があったが、今は省略、底本には【また其後に】（奥書に続けて）「宇治川の」の【歌】があった、と説明する一文なのではないか。

あるいは、当初真風が鮎主から示されたのが『金槐和歌集』『田安垂槐御歌』の二作品であったことを考えると、「此間に」は単に『田安垂槐御歌』だけではなく『金槐和歌集抜粹』も含めた二作品を指して、この二種の抜粹本、及び最後の歌という三つの塊の【間に】それぞれの奥書が挟み込まれていたが、この写本ではそれらは共に省略した、最後の歌は次の通り、として「宇治川の」の歌が置かれていた、とも考え得るのではないだろうか。

もしこのように考えた場合、この奥書の

筆者を秋成とするのは少々不自然な感じがしないでもない。「阮秋成記」の表記に係るのはその直前の和歌のみであって、「また其後に歌」までは、転記者のメモである可能性もあるのではないかと思われるが、いかがであろうか。倉卒なる案にして、大きな見当違いであることを危惧するが、とりあえず一案として提示しておきたい。

何れにしても、この『田安垂槐御歌』には魚臣本の持つ秋成奥書は記し留められていないのであるが、仮にこの筆者が秋成でなかった場合の、その理由にも思いを馳せてみたい。『天降言』全文を載せる天理図書館蔵本と抜粋本『天降言』（魚臣本）の奥書がほぼ同文であることに留意すれば、全文の写本は既に筆者の手元にあり、今ここの筆者の関心は「秋成がどの歌を選んだか」という点に絞られている、と考えることができるのではないか。奥書がほぼ同文であれば、これを省略するのは自然なことであろう。この事例は逆接的に、秋成の和歌的審美眼に対する門人らの強い関心を浮かび上がらせているように思われる。

以上、奥書から読み取れる（かもしれない）もう一つの可能性を縷々申し述べてき

た。しかし、仮にそうだとしても、高松氏の立論の価値はいささかも減ずるものではない。まず第一に、この奥書に「金槐集の抜粋」と明言されていることにより、高松氏が本章段で推測した通り、鮎主が見ていた書が『金槐和歌集』ではなく『金槐和歌集抜萃』であることが確定的になった。さらにこの奥書の内容は、この写本の享受者において『田安垂槐御歌』と並んで『金槐和歌集抜萃』も奥書が秋成筆であると認識されていたことの証左となっており、高松氏の推論の正しさを証するものとなっている。また、新出歌「宇治川の」が秋成作であることも揺るがない。我々はこの一首、万葉調歌人である先達二人を称揚するに万葉語「こつみ」を用い、今に至るまでの伝統が絶えないことを寿ぐ、秋成らしい一首に新たに出会うことができたのである。

次に取上げたいのは秋成の自歌合を論じた第二部第二章「秋成歌論の側面―十五番歌合」をめぐる一である。この章では、永らく所在が確認されなかった旧沖森直三郎氏所蔵の伝瑚璉尼筆本が今や高松氏の元に帰したことを紹介された上で、従来知られていた天理大学付属天理図書館所

蔵本（および京大本）と、この伝瑚璉尼筆本とは別系統であるという刮目すべき結論に至る。すなわち、寛政八十年頃に成立した伝瑚璉尼筆本の判詞が秋成自身のものであるのに対し、天理本は荷田信美判であり、それゆえ優劣の判定が異なっているのだと結論付けられる。新資料の紹介、的確な分析、そしてそれに基づいた新見の提示と、大変刺激的な、まさに三拍子揃った論文で、新しい資料に出会う喜びを感じながら、大変楽しく拝読した。

興味深く感じたのは、例えば次のような点である。高松氏は伝瑚璉尼筆本を対象としてその判詞を分析し、秋成の詠歌方法を「題詠観」や「面影の尊重」など七つの観点から分類している。その中の一つ、「①「よせ」の重視」の項（二二八頁）で、「きざす」を題とする左歌「岡こえの小松まじりのつ、じ原ありかを見せてなく雉子かな」について、伝瑚璉尼筆本の判詞に「岡こえとあらば、ゆきかふこと葉もあらまほしう覚ゆる」とあることが紹介される。これを念頭に、高松氏が「岡越」と「雉」の取合せの証歌として挙げられた歌、「子をおもふ道のささ原岡越に誰ふみたてて雉な

くらん」(正徹『草根集』)を見れば、確かに

ここにも道中の往来を意味する詞句「ふみたてて」がある。そこで改めて秋成の和歌を見てみると、実はこの語は対となつてゐる右歌「春雨に垣根の小柴ふみたて、やどりがほにもきゞす啼く也」に見えるのである。ここで秋成は、判詞の中で思わず、問はず語りに自らの詠歌の勘所を明かしてしまつてゐるのではないだろうか。両歌とも秋成作であることを考慮すると、秋成は右歌に使つてしまつたこの語に代わり得る言葉を探し当てられず、これを左歌の「瑕瑾」と自覚してゐたのではないか、などと制作過程が想像され、面白さは倍増する。

一方、天理本の判詞は「左、見るが如くに仕立られたり。右、塙ねふみ立てやどり顔も面白かれど、小松交りの躑躅原にありかをみせてなど、しらべ高くと長閑にて、けしきまさりて承る」とする。これが信美判だとするならば、彼はそのような制作の裏側までには思ひ及ばず、一般的な判詞に落ち着いたということであろう。

判詞の違いに注目する、という高松氏の分析方法は的確かつ有益であり、鋭敏なる感覚を持つ氏の手によって更に深められた

読解をぜひ読んでみたい。

なお、翻刻における、意味に関わる読み誤りと思われる箇所については、率直に申し上げておきたい。勿論これは揚げ足を取るつもりは全くなく、今後の作品読解に関わる重要な点であると考えからである。

まず八八頁五行目、「夕顔」と題する兼題和歌の詞書中にある「げにこしの花」は、文脈から考へて朝顔の漢名、「げにこし(牽牛子)の花」であろう。また、一三七頁二行目「甘心とす」について、一五九頁の影印では「甘心せす」と読めるように思われ、意味の上からも「…の詞甘心せず、落句もすこし俳諧めきたためれば」(傍点筆者)の方が通りがよいように思われるが、如何。ともあれ、述べてきたように数多くの新資料が提示されたばかりでなく、今後の秋成研究において非常に重要な論点が幾つも提示された本書を一読すると、ここからまたダイナミックな研究が始まつていくであろう予感にワクワクさせられる。高松氏の今後のご研究に大いに期待している。

(二〇一七年二月 笠間書院 三六八ページ 本体八五〇〇円)

(このえ のりこ 駒澤大学教授)